リ、

〔本朝世事談綺二器用〕摎元結

寛文のころより起る、紙捻をながく縷て水にひたし、車にて縷をかけて水を摎ゆへに、云ごき元結也、

〔俳諧江戸辨慶〕髪置

髪置や正木のかづらこき本結　山夕

〔本朝世事談綺二器用〕紙捻又髪捻と書

若衆女の長く用るは平元結とて、紙を一寸ばかりにたちて卷そへしなり、

〔歴世女装考四〕元結

今のたけながといふ物、近きむかしは平元結といへり、それを髷へむすびて、はねそらしたるを、はねもとゆひとて飾と云たるなり、

〔鳩巣小説下〕本能寺にて明智日向守軍勢、本堂へ噇とおし込候時、〇中略四方田何某と申者、脇の口より鐵炮さげ候て押込候所、蘭丸左の手に刀を提げながら、白小袖に、髪を修禪寺の平元結にて、茶筌髪に結候て駈出、何者に候やと詈候處を、四方田鑓にて突伏申候、

〔好色一代男三〕袖の海の肴賣

行くに程なく小倉に著きて、朝景色を見るに、木綿鹿子の散し形に、茜裏をふきかへさせ、どしの帶前結びに平鬢太くすべらかしに結び下げ〇下略

〔本朝世事談綺二器用〕摎元結

文七元結といふあり、是は紙の名也、至て白く艶ある紙なれば、此紙にて製するを上品とす、

〔世事百談〕文七元結